

《翻訳》

医師の義務と資格にかんする講義（承前）

(Lectures on the Duties and Qualifications of a
Physician (1770, 2nd 1772)¹)

ジョン・グレゴリー

(John Gregory)

(松家次朗訳)

第5講義

[[自然]の諸法則が実際に存在するよりも少なくかつより単純であると想定することにおける誤り]

人間の本性への私たちの探究には、その本性の諸法則に関する知識を得ようとする際の性急さと、単純さに対する自然な愛とがあり、[これら両者が]が私たちをそれらの諸法則が実際に存在するよりもより少なくかつより単純であると考えさせると、私は以前に述べた。より多くのことを知れば知るほど、ますます自然の諸々の作品の非常な広大さと多様性と比べたときの、「自然」の諸法則の一様性と単純性を私たちは発見する。しかしそうであったとしても、私たちは自然の諸作品の広さと多様性が、私たちの知識、あるいは、ことによると私たちの理解（comprehension）の狭い境域内に限定されるとすら想像してはならない。天才の並外れた努力によって、アイザック・ニュートン卿が、地球上の物体をその中心へと引き付けるその同じ法則によって、すべての惑星が太陽へと引き付けられることを発見したとき、それまでその原因に私たちが無知であった多くの現象がこの単純な原理によって説明された。しかし、その原理はすぐ

*2016年1月12日受理。

に、後に [その原理とは] 非常に異なった法則に依存していることが発見されることになった他の諸現象に誤って適用されるにいたった。* [*リード (Thomas Reid) 博士の『人間精神の探究』を見よ。]²デカルトは物質世界の彼の体系を二つの原理、すなわち、物質の存在とそれに根源的に刻印された一定量の運動の上に基礎づけた。しかしながら、これらの原理では不十分だということが見出され、そしてさらに、物質の粒子を相互に引き付けたり、排斥したりする、今まさに言及した重力の原理、凝集力、微粒子的引力、磁力、電気やその他の力を私たちはさらに認めなければならないことが明らかにされるに至っている。アイザック卿自身すら類推と単純性への愛によって、独特の慎重さと用心深さをもっているにせよ、物質的世界のすべての現象が、物質の粒子における引力と斥力に依存すると推測するよう導かれたのである。しかし、私たちには現在彼が欺かれていたのではないかと信じるに足る理由がある。というのは、無機界 (unorganized kingdom) においてすら、塩類、結晶体、スパー (sparrs)、やその他の多くの物体を一定の形に凝固させる諸々の力が、物質の粒子における引力や斥力によって決して説明できないこと、さらに、植物界や動物界には、無機的物体の力とは異なる本性の力を示す明らかなしるしが存在するからである。感じたり、考えたりする、そしてまた動物の運動の起源だと思われるある種の内的な原理を私たちは意識している。その原因について私たちは全く知らないが、しかし、それがそれ自身独特の法則をもっていることは分かるし、それが身体と結びつくことで、物質の諸法則では十分に説明できない結果が生み出されることも私たちには分かる。

[人々の自然な性向が、彼らの文章表現の特徴に影響する]

ここで私たちは、人々の異なる性向が彼らの文章表現上の特徴にどのように影響するかについて見てみることにしよう。

[生き生きとした暖かい想像力を持った人々と、冷静で落ち着いて識別力のある人々における例証]

通例、生き生きとした温かい想像力をもった人々が、類推に対し非常に強い関心をもち、その類推において彼らが幻想によってしばしば欺かれることを私たちは知っている。こういった類推に基づいて、彼らはあまりにやすやすと一般原理を確立する傾向にあり、そういった原理にあま

りにも強く愛着を抱くので、自らに対して開かれている対象を見ることができないのである。とはいうものの、何らかの偶然によって、仮に諸原理に関する彼らの見解がぐらつきはじめると、彼らはまたあまりに性急にそれらの原理を放棄してしまう。いくつかの困難を負わされているにしても、それらの原理も概して十分な根拠をもち、もう少しの忍耐と粘り強さがあれば、おそらく、それらの困難も克服できたかもしれないというのに。世界は役立つ発見を時にこういう人々に負うこともある。役立つ発見そのものは、計画によって、成功の達成に必要なある種の小さな事実を彼らが見落とすことによって、しばしば駄目にされるが、資質の劣る人が後にその事実に関心を払い、彼らから彼らの発明の名誉と利益の二つともを奪ってしまうのである。さらに見ておきたいのは、このような天才の活発さには一般に、人々をして事実や実験に対する適切な注意を不可能にさせ、どのような仕事であれ人々が結論に達することを妨げる、ある種の我慢の無さが伴っていることである。

今述べたものとは反対の天才の一種、すなわち、冷静沈着で一見同じように見える事物の相違に気づく天才の種類が存在する。この種の天才は、より生き生きとして、創造的な精神の諸々の働きに注意を払い、そしてあまりにしばしば彼らの過ちを滑稽なものにしてしまう。実際、芸術や科学において新しい道を創始する独創的な天才はあまりに少ないので、彼らは可能な限りの激励を持って遇されるべきである。とりわけ自らの見解を穏やかに提示する時はそうである。通常、道筋からしばしば逸脱する人々は、ときに道を間違えざるを得ない。しかし、ときに彼らは重要な発見をするから、彼らの過ちは寛大に遇されるべきである。以上の二つの[天才の]特徴は、同一人物において、様々な程度に統合されている場合がある。特に発明に適したあの暖かく生き生きとした想像力を所有し、かつ同時に、明晰、正確、健全な判断力を備え、彼によって提案された計画に対するすべての反対を率直に考慮し、証拠の重さに従って、それらの計画をすべて拒絶するか、あるいは、それらの真の価値が確認されるまで、自らの判断をそれにふさわしい未決状態に保つことのできる人もいる。天才と判断力のこのような幸福な統合を、私たちはめったに目にすることはないが、最高位の一流の哲学者を形成しているのはそれである。

[驚異的なものに対する愛好の悪い帰結]

諸々の技術に役立ち、有用な自然哲学の基礎に資するために、自然誌を収集する際、「自然」が私たちに提示する無数のなかから事実の選択を行う必要がある。私たちの視界は、比較され分類されて、一般的な原理へと通じるだろう事実に限定されるべきである。それゆえに、それと類似したものを全く持たないどのような奇怪な産物の歴史も、好奇心を満足させることにしか役立たない。けれども、好奇心というこの原理や、驚異的なものに対する愛は、人類においてきわめて広く行きわたっているので、「自然の見世物 (lusus naturae)」のあらゆるものは、大体において彼らの尊敬の念を引き付けるのである。ある種の動物が二つの頭をもってこの世界に出現するとして、現在私たちはヨーロッパ中で出版されているその怪物の詳細な記述を持っているが、それは科学の進歩に何の帰結ももたらさないものではない。驚異的なものに対するこの愛は、幾人かの医学の著述家において目立つのである。私たちは彼らの著作が、それらに類似のものを全く持たないような、以前に決して生じたことのないような、したがって、おそらくは決して再び生じることのないような異常な事例で満ち溢れ、うんざりする程の緻密さで記述されているのを見出すのだが、他方で、いくつかのありふれた病気を、それらに似てはいるが、異なる本性をもったその他の病気から区別する諸々の兆候については、すでに確定されている状態とは全く言えないのである。異常な出来事の中には「自然」の通常の成り行きにおいて、その諸法則に光を投げかけるように見えるものもあるので、私はここですべての異常な出来事の記録に異を唱えるつもりはない。私の意図はただ、驚異的なものに対するこのような度を越した愛着が、私たちをして、より一般的な効用の探究を怠らせるように導く場合の、その愛着をとがめることなのである。

[自然誌研究における悪癖]

自然誌に対する現在流行の価値観では、自然誌は医学や農業やその他の有用な技術に役立つ健全な哲学の基礎というよりは、むしろ好奇心の対象と見なされる。すべての自然の産物が長たらく記述されるだけでなく、正確に描写もされる。確かに、ある種のカエルの自然誌にフォリオ本を費やすのは、その中でその動物が多種多様なポーズで描かれるとしても、やはり行き過ぎである。自然誌をこういうかたちで拡張していくと、有用な知識を増大させることなく、書物が無

制限に増加されていくのは明白である。

[諸科学の進歩を遅らせてきた諸原因]

諸科学の進歩は、以下の原因によってたいそう遅らされてきた。

[その1：諸科学の目的、すなわち、生活の便益と生の幸福に対する無頓着]

主要な原因のひとつは* [* Bacon 『諸学の発展』を見よ。]、諸科学の開発の第一目的、すなわち、公共的有用性、あるいは、生活の便宜性と幸福に貢献するものに対する無頓着にあった。この目的に代えて、大抵の人々は知識の追求に好奇心を満足させる以外の目標を持たない。それが彼らの楽しみに多様性を与え、あるいは、それが虚栄と自慢という目的に奉仕するからである。おそらくその真の目的を軽視することで医学ほど被害をこうむってきた科学はないであろう。[医学の真の目的とは] 私が以前に述べたように、健康を維持し、生命を延ばし、病気を治すことである。実際、医学は有用で実践的な技術の中でもっとも遅い進歩を行ってきたのである。それは天才の欠如によるのではなく、天才の誤った適用に由来する。また学問の欠如によるものでもない。というのも、いずれの専門職も、有用で洗練された学識のすべての分野において [医学ほど] 多くの優れた人材を誇ることはできないからである。医師たちは自らの専門職と結びついたあらゆる科学、すなわち、解剖学、植物学、化学、そしてまた、自然誌の種々様々な分野を成功裡に開発してきたばかりでなく、しばしば、彼らは詩人や数学者や哲学者としても際立つ存在だった。とはいえ、天才もしくは勤勉により彼ら自身の専門職の実践的な分野を進歩させた医師の名を私たちはほとんど挙げることができない。逆に、自ら自身の想像力をほしいままにし、それを台無しにしたばかりでなく、観察と経験に基づくすべての技術に時が自然にもたらす緩やかな進歩を妨害すらした、どれほど多くの医師の名前を私たちは挙げるができることか。しかし、医学が他の実践的技術と比較してこれほど緩やかな進歩をした理由は、この技術そのものの難しさと複雑さに一部は帰せられるかもしれないし、一部はこの専門職が置かれているいくつかの不利な条件に帰せられるかもしれない。私は後にこれについて説明を試みるつもりである。

[その2：さまざまなやり方で表示される無益な精妙微細な区別、例えば、分類に対するあまりに過度な愛着。分類という主題についてのさまざまな観察]

自然に対する私たちの探究に役立つだけでなく、天才と勤勉に間違った方向を与えることによって実際に害を与えるある種の形而上学的な精妙さというものが存在する。これが学全体を長い年月にわたって暗黒と論争に巻き込んだのである。それは学者たち (schoolmen) によって徹底的になされた。彼らの多くは大いなる鋭敏さや修道院の生活から来る有り余る余暇をもってはいたが、優れた著者たちをほとんど知らず、ましてや「自然」の諸作品についてほとんど知らなかったから、僅かな素材からあのような学問の蜘蛛の巣を紡ぎ出した。なるほどその糸の繊細さには興味をそそられるが、実体もなければ有用性もない。彼らの著作は精妙さと言葉の遊びから出来ているように、また、彼らは絶え間ない論争を引き起こし、いかなる有益な結論にも達しなかったから、人類のより賢明な人々は彼らにうんざりするようになった。その結果、今ではその古い学校哲学 (school-philosophy) は、あらゆるところで軽蔑されている。この哲学が医学以上に損なった科学はない。ガレノスの時代から前世紀 [17世紀のこと] の半ばに至るまで、医学 (physic) のすべての教育 (institutions) が、要素 (elements) や気質 (temperaments) の教義で満ちているだけでなく、質問 (inquiries) で満ちているのである。健康の獲得は医学の手段 (design) なのか、それとも最終目的 (end) なのか。病気はある種の性質 (quality) なのか、それとも関係 (relation) なのか、等々。一般的に云ってそれらは言葉に関する議論だった。そしていつであれ用語が定義されると論争は終わったのだ。人間の理解力の恥となるような議論に無駄に費やされ、それを完成するには形而上学より、注意深く抜け目のない観察を必要とする技術を損なうのに使用された勤勉、学識、そして度々の天才のことを思うと本当に気が滅入る。

無益な精妙さは二つの仕方で示されると言えるだろう。重要性はないが、探究が困難な研究の遂行において、あるいは、重要な課題を実りのない推論と論争にしか導かない仕方を取り扱うことによって。私たちは最初の事例を昔の学校論理学と古代もしくは現代のたいていの形而上学において持っている。私は、それが若き精神の習練と見なされるならば、そのようなものの役立つことを認める。それらは創造力を研ぎ澄まし、推論能力を強化、改善し、結果として注意力を持続させることにつながる。しかし、長く一つのことに留まり考え続けると、それらは「自然」や

実践的な技術の研究から注意をそらさせることになり、結果として人々をして確固とした推論家よりはむしろすぐれた論争家にし、あらゆる主題に関して言い争う習慣という、対話において極度に不愉快な習慣を生じさせる。事柄を過度の正確さをもって比較対照するというやり方は、天才に関する拡大された見方や諸学の進歩や私生活における仕事の上手な処理にとって不利である。これらにとって必要なのは、蓋然性や、主要な原理や、対象の大まかな輪郭に注意を向けることであり、成功のための最大の蓋然性がどこにあるのかをすばやく認識することであり、この結果として、柔軟に精力的に活動するという習慣のみである。

私たちが重要な課題を突きのない推論と論争にしか導かない仕方では取り扱うのは、私たちが必要とされる準備や、私たちがそれらに本質的に結びついていると想像するが、実際にはまったく関係がないか、あるいは、非常に遠い関係しかないポイントについて苦勞して事細かな議論に携わるときである。私たちが一定の限界を超えて「自然」の中に入り込み、私たちの知力の範囲を超えて諸原因の探究を企てるか、あるいは、それが知られるとして、私たちが有益な結論へと導きえないようなことを試みるときも、同じく無益な労働である。アイザック・ニュートン卿が現れるまで、このような仕方では哲学者たちはしばしば重力の原因を説明しようと試みた。しかし、かの偉大なる人物は、重力がそれに従って働く諸法則を探究することに留め、ただその原因の推測を穏当な質問形式において提示するに留めた。重力や磁力や電気がそれに従って働く諸法則は、探究の適切な主題である。それは、それらは私たちの知力の範囲内にあるし、それらに関する知識は、最も有益な帰結に導いていくからである。しかし、それらの原因はたぶん私たちの最も深い研究さえ逃れるであろうし、おそらくまた、その発見は役立つものではないだろう。心と身体の相互の影響は、医学におけるもっとも重要な探究の一つであるが、この結合の本性にいたる探求は等しく捉えどころのない不必要なものである。

無益な精妙さにはもう一つの種類が存在する。³それは分類と方法に関する過度の正確さから成っている。分類と方法は疑いなくいかなる主題を取り扱う際にも配慮されるべきものであるが、自然誌のすべての分野において特に必要とされるものである。植物や他の産物の、いくつかの目、属、種への適切な分類は、記憶にとって大いなる助けとなるし、それらの価値の知識につながる。しかし、完全な分類は非常に困難な課題で、企図された分類の対象となるすべての項目

についての知識なしには達成されえないものである。植物学のいくつかの体系にその実例が見られる如く、そのような分類は、異なる原理にもとづいて試みられるのであろう。それらの内のひとつは全体として見れば残りのものに比べより完全なのかもしれないが、それでもなお、それら体系の各々はそれ固有の長所をもっているであろう。同じように病気もそれらの兆候やそれらの遠いあるいは近い原因に従って分類されるであろう。そして他の異なる仕方ではそれらのすべてが非常に不完全であるかもしれないが、しかしそれらの各々は何かしら有益なのかもしれない。

病気の適切な分類には多くの便宜が伴う。自然な類似性をもつ病気を一つにまとめることで、ある病気の来歴が他の病気の来歴に光を当て、それらが一致する条件を比較することで、属もしくは類に関して一般的な原理が形成される。しかし、このような利点は、病気の自然な本当の類似性という原理に基づく分類にしか伴い得ない。实例は、間欠的熱病、局所的炎症、出血に見られる。しかしそのような利点は純粋に人為的な分類からは得ることはできない。Cachexiae [悪液質] の綱のもとに疾病分類学の著者たちによって理解されている病気の異なる目は、その綱が定義されている実際の関連性のいかなる条件においても一致しない。その異なる目を形成しているたいていの個々の属ですらあらゆる物質的条件において似ていない。病気の適切な分類は、医療行為のある事例に困難を見出している医師にとって、それを著者たちによって関連付けられている類似の事例と比較することを容易にすることで役に立つ。同じようにそれは記述を短縮化するので、観察したことの伝達を容易にする。

明瞭で正確な定義の欠如は、医学においても、科学の他の分野におけると同様、ただし、抽象数学は除かれるが、大きな混乱と論争の原因である。現在同意されると思われていることは、もっとも頻繁に現れ、感覚にも明らかで、それらの病気をそれらときわめてよく似ている他の病気から区別するのに役立つ兆候を単純に列挙することによって、病気の属を定義することがもっとも好都合だということである。病気の定義にはそれらの近似の原因に関するいかなる仮説も含まれるべきではなく、また、いかなる点においても定義は仮説であるべきではない。そうでなければ、医師たちは、近似の原因に関する彼らの見解が同じになるまで、同一の観念を同一の言葉に帰する点で決して一致しえないことになる。病気が明白な兆候の単純な列挙によって定義されると、どの患者に対してもその患者の訴えに与えられるべき名称に関して意見が食い違う余地はな

くなる。病気の定義は可能な限り一緒に存在する兆候から取られるべきであるが、ときには、その病気を特徴づけるために、間欠的かつ発疹性の熱病の場合のように、継続的に生じる兆候を列挙することも必要である。避け得るのであれば、定義には病気の始まりにおいて生じた兆候は含まれるべきではない。おそらく患者はそれを説明できないだろう。また、定義は病気の持続期間に依存してはならない。そのようなものは常に不確実であるから。ときには、兆候だけではその病気を異なる本性の他の病気から区別するのに十分ではないので、定義にその病気の外的なもしくは副次的な原因を含むことも必要である。しかし、外的な原因は、それが明白でないのであれば、定義の一部とすべきではない。いったん確立された名前は、よほどの緊急の理由なしには変更されるべきではない。しかし、医学の著者たちがある一定の集合の兆候にある名前を与えることに既に一般的に同意している場合には常に、その用語は混乱を避けるために異なる集合に異なる理由があろうとも適用されるべきではない。

何といても、病気の属を、ある場合に、特定の事例がどの属に帰すべきかを疑いの余地がないほどの正確さで定義することは不可能である。自然誌において物体を体系的に分類するよりも、病気を体系的に分類する方により大きな困難が存在する。それは、診断に役立つ兆候がしばしば不正確であることから生じることもあれば、兆候が長続きしないということから生じる場合もある。病気がしばしば相互に併発することから生じる場合もある。

これまで病気を方法論的に分類しようと試みてきた人々は、綱、目、属の数や区分の仕方や定義に関して互いに大きく異なっていた。ある人が属として数えたものを、他の人は種あるいは兆候と見なした。そしておそらくまた、人間の才能では、個々の病気の知識と医学という学問が完全なものになるまで、この種のあらゆる試みに伴う困難や不完全さを取り除くことは可能ではないだろう。

それ故、分類というこの課題が論争に豊かな平原を提供し、それによって注意が病気そのものや病気を取り扱う適切な方法の研究から病気が整理されるべき序列に関する実りのない推測へと逸らされるのは明白である。私がそれらの推測を実りのないというのは、それらがもっと有益に使用されうるだろうあまりに多くの時間と注意力を無駄にしている限りにおいてのみである。この課題については、私はあなた方にカレン博士 (Dr. Cullen) の病気の分類を推奨しておかなければ

ればならない。それは自然で単純であり、彼の定義の明晰さと正確さのためである。⁴

私たちが自然誌における研究を正当な分類や名前の知識以上に押し進めないならば、私たちが学んできたことは、ギリシャ語文法やギリシャ語辞典の単語の知識が、ギリシャの作家の作品を決して覗くことのない人に対する以上の重要性を持たない。私が自然誌について残念な気持ちをもって語るのは、その第一の目的があまりにも軽視されているのを目にするからである。私はそれが現実の有用に資するものとしてよりはむしろ好奇心の素材として、あるいは、独創的な思索の諸々の主題を提供するものとして研究されているのを目にする。植物の綱や目や属を決定することは、その用途を確認することに比べほとんど重要性を持たない。にもかかわらず、一方の課題はたいそう手厚く関心を寄せられ、他方の課題は軽視されるどころではなかったのだ。それは多くの偽りの事実により台無しにされてきた。特に医学と関係するものにおいて。人体を襲うかの蠕虫をその適切な位置に置くことや、それらの構造を最大の正確さをもって吟味することに多大な努力がなされてきた。しかし、身体内のそれらの存在のしるしや、蠕虫が生み出す兆候やそれらを破壊するもっとも効果的な方法を突き止めることに、それに釣り合うだけの配慮はほとんどなされてきていない。けれども、私はこの機会に偉大なるリンネの功績を正当に評価することを省略することはできない。彼は自然誌のすべての主題をあれほども完全で美しい体系にまとめ上げることにおいて、あれほどの独創的な才を示した。そして彼はここで止まらなかった。彼は自然誌を人生の有益な諸目的に、とりわけ農業や医学に適用することで、最大限に拡張された観察の精神を示して見せたのである。

[その3：信じやすさ]

諸科学の進歩は、それらを開拓した人々の信じやすさによって大いに遅らされてきた。この信じやすさは、正式に証明されていないにもかかわらず、事実だと主張されているものに容易に黙従することに明らかである。そしてそれはまた、ある種の人を惑わす技術の持つ諸々の力を好んで信じることに、あるいは、偉大な名前に対する凝り固まった愛着に、あるいは、古代文化に対する盲目的な崇敬の念に明らかである。

(a) 事実を裏付けもなく認めるといふ事実に関する信じやすさは、自然に関する知識のすべての分野を損なってきたが、医学ほど損なわれた分野はない。アニマル・エコノミー [動物の生体システム] に基づく事実は突き止めるのが難しいに違いない。というのは、それは私たちが突き止めることのできない様々な原因によって、突然の思わぬ変化を被りやすいからで、しばしば、何らかの物質的な原因に基づくのではなく、神経組織のある種の知られざる影響に基づくからである。それ故に、熱くなった想像力なら容易にそれらの事実を誇張するだろうし、騙そうという気持ちがあればそれらの事実を容易に偽造するであろうが、同時にその誤りを暴くのは困難である。ここに治療法の効果に関する私たちの説明がいまだに不確実性と間違いに満ちている理由がある。自然誌の他の多くの分野は、とりわけ化学は最近それらから解放されたのだが。医学は理論によるよりもこの理由により苦しんでいる。理論の弱さは容易に暴露される。一人の鋭敏な人物の理解力でこれをするに十分である。しかし、完全にありのままに表現された事実を、間違っただあるいは誇張された事実から区別するには、しばしば多くの人々の共同作業が必要である。そしてまたそれは、観察あるいは、おそらくは患者の命を危険にさらすかもしれない実験を繰り返す機会が与えられるまでなされえないものである。私がここで言わんとしているのは、いかなる事実も自然誌の中に、あるいは、医学の中に受け入れられるべきでないということではなく、申し分なく確立された事実が受け入れられるべきだということである。私はただ不確実な報告と疑いのない真実を適切に区別することなく、混同することの不適切を示そうとしているだけである。事実と主張されているものは何であれ、それがいささか尋常ではなく、僅かな裏付けによって支えられているものであっても、その真実が確認されるまでは、記録されるに値する。たんに私たちがそれらを説明することができないからという理由によって事実を拒絶することより以上に、「自然」に対する無知、あるいは、自惚れを示すものはない。

(b) ある種の技術、特に占星術や自然魔術や錬金術の持つ力を好んで信ずることは、天才人の注意を虜にし、迷信と錯覚に基づいた多数の間違った事実をとりわけ医学に導入することで、知識の進歩を大いに遅らせてきた。こういう技術は、生活に役立つと約束し、理性のいかなる力も人々をそれらに対する魔力から解放できないほどに想像力をしっかりと捕まえたのである。と

はいえ、それらは場合によってはいくつかの興味深い発見を惹起したし、精神に対するそれらの影響は、人間の想像力の歴史にいくつかのすばらしい素材を提供することもあるだろう。

(c) [その4：偉大な名前に対する愛着]

一定の偉大なる名前に対するかたくなな愛着は、科学に大きな害をなしてきた。哲学の歴史は時々体系を樹立する際立った才能を持った人物を世界に提示する。この体系は2,3年間採用され、学者たちはその体系に注釈を施した。ある人は回るくどい説明を与え、ある人はそれを要約した。しばらくの間、彼らの中で自らの源泉となった人物よりも高く抜きん出た人は誰もいなかったし、それほど高く達した人もほとんどいなかった。2,3年の経過の後、他の独創的な天才が現れ、彼の先人の体系の弱点を暴露し、それに代わる別の体系を打ち立てた。この体系もまた、注釈者や解説者や要約者によって同じような敬意を払われた後、軽蔑と忘却の淵に沈んだ。これがヒポクラテスの時代から現代にいたるまでの医学の運命だった。現在では、権威の束縛を投げ捨て、事実に関しては「自然」に訴え、見解と推理に関しては個人の判断の権利を主張する一般的な傾向が存在するように見受けられる。私は何もこれらの事柄に関してすべての個人が自分で考えることの可能性を言いたいわけではない。自然は人類の大部分が自分で考えることや、あるいは、自分自身の原理から行動することを決して意図していなかった。私はただ次のような遺憾の念を表明しようとしているに過ぎない。すばらしい才能に恵まれた人々が、自らが確認すべきだった権威に感化され、自らの判断力を少しでも行使すれば、土台がしっかりしていないと証明したであろう教義に賛同しているという遺憾の念である。

(d) [その5：古代文化に対する盲目的な称賛]

科学の進歩に対するもう一つの障害は、先に述べたものと類似した、古代文化に対する盲目的で迷信的な崇敬の念であった。学問的世界の現代の状態や、現在広く行われている探究の自由な精神しか知らない人々には、古代文化に対するこの愛着が先立つ時代にどれほど高くまでもたらされていたのか、その愛着が天才の努力を麻痺させ、知識の進歩をどれほど遅らせたのか想像できない。けれどももし私たちがこのような愛着が主に広く行われていた時代におけるその力を

考えると、それも自然で弁解の余地ありと見える。ローマ帝国の衰退に際して、有益な諸科学と洗練された諸技術のすべてが急速に崩壊し、ついには、「夷狄 (Barbarians)」の継続的な侵入により完全に消滅させられてしまった。無知のベールが15世紀の終わりごろまで人類を覆った。しかしながら、時々、天才のいくつかの閃光がその暗闇から現れ、幸運な偶然が古代の技術と知恵の中でもっとも価値のある残存物のいくつかを保存した。医学は他の諸科学の [同じ] 運命を経験し、同じ暗闇の中で眠った。15世紀の半ばごろ、コンスタンティノープルがトルコ人たちによって奪われ、そこにあったギリシャ語写本の多くがテオドーレ・ギャザによってイタリアに持ち込まれた。「印刷」という素晴らしい技術が同じころに発見され、すぐさま古代文化のそれらの宝をヨーロッパ中に広めた。歴史年代記上非常に重要で、諸々の偉大なる出来事で非常に有名であるが、およそこの時期に、人々はそれほどまでにながく沈み込んでいたあの昏睡状態から目覚め始めたのである。ギリシャとローマの作家たちの最初の発見において、世界が多年目にしてきたものを超える、彼らのセンスや、彼らの眼識 (taste) や、彼らの洗練さはすぐに知覚され、承認された。だから学者や発明の才ある人たちが、その当時、時間とバーバリズムの破壊を免れ、何世紀にもわたって修道士の庵の中で埋もれていた古代文化の残存物を発掘し、翻訳し、注釈を施すことに専心したことは、想定されえた。世界はそれらの学問の再建者たちにどれだけ多くの物を負っていることか。古代の作家たちの発掘によって生み出された直截な効果が、彼らの主要な美点の本質が何だったかを明瞭に示していた。あらゆる芸術、絵画、彫刻、建築が、たちまちのうちに高い完成度にまで達した。言葉の純粹さや作文の優れた簡潔さは、とりわけ詩や歴史において、詳細に研究された。しかし、自然誌と自然哲学は大いに軽視されたままだった。その理由は、美的感覚と想像力のすべての作品において、[すなわち] 詩において、弁論術において、作文の直截さと正確さと優美さにおいて、古代の人々はこれまで匹敵するものがない卓越性を所有していたことにある。同じように、抽象数学においても、数学的推論の特質であるべき明晰さと精密さの基準として彼らは残り続けるだろう。しかし、自然誌においては、そしてまた自然哲学においては、彼らはそれと同じ程度に上首尾であったわけではなかった。これは、一部は彼らがそれらの課題に十分な注意を向けなかったことにもよるが、一部はこれらの科学がその進歩のためには、一人の天才によるよりは、多くの人の集積された労働に依存するからでもあった。だから

ら、ホメロスやアペレス (Apelles) やプラクシテレス (Praxiteles) やデモステネス (Demosthenes) といった人々は、詩や絵画や彫刻、あるいは弁論術を、彼らに続く人々の誰よりも高く高めたのだらう。というのは、彼らが死んだとき、彼らの技術も、彼らとともに大部分死んだからである。しかし、自然誌と自然哲学では、事情はまったく異なる。というのは、それがどの分野であれ、これらの研究のいずれかの分野に専心するすべての人々が、先人たちの努力と改善のすべてを利用しうるからである。学問の復活の当初、「自然」に関する知識は低レベルだったし、また、古代の人々の著作によってそれに当てられる光はほとんどなかったから、それは、前世紀の中ごろまでほとんど無視されたままの状態を続けた。その時代前の学者や発明の才ある人々は、一般的に彼らの注意を神学的研究や芸術や洗練された古代の文学のいろんな分野に向けていたのである。

学問の復興に際して他の諸々の科学に広がっていた古代文化に対する同じような暖かい称賛は、きわめて正当にも医師たちをして、彼ら自身の専門職における古代の作家たちに結び付けた。しかしながら、ヒポクラテスの盲目的な称賛に代わって、彼は適切にも医学の父であり創設者と称されているが、彼らが彼の観察に対する精神の幾分かなりを吸収していたとしたら、それは人類にとって幸せなことだったであろう。ヒポクラテスは、病気に関する彼の的確で信頼にたる描写や彼の誠実さや彼の良識や彼の文体の純然たる気品の故に、常に高く評価されるであろう。しかし、彼の後継者たちは、彼の構想を遂行せず、彼が築いた基礎の上に建てることをせず、自らの時間を彼の著作の注釈に使ったのである。

ガレノスは、主として彼がヒポクラテスの本当の作品と判断したものについて書くことで始めた。その中で彼は矛盾すると思われるすべてのものを首尾一貫させ、ヒポクラテスの観察の真理を、彼自身の広範囲にわたる経験ではなく、アリストテレスの哲学に基づく様々な議論によって証明しようとしている。それらのいくつかは確かに明敏で独創的なものであるが、大部分は根拠希薄で詭弁的である。観察の本に注釈をつけるというこのようなやり方は、まったく馬鹿げている。ここでの第一の探究は事実の真理に向けられるべきである。これらの事実が同じような観察によって確証されるまでは、それらの原因を説明しようとする試みは時間と労働の無駄である。ヒポクラテスは、私たちに数多くのすぐれた観察を残した。その中にはある一定の場合にだけ、

またある一定の制限下にのみ真であると見なされるものも含まれている。また、彼が住んだ国と風土に特有のものもあれば、あまりに漠としていて理解できないものもあるし、根拠に乏しいものもある。興味をそそり、重要に見えるが、それらに関して彼の数多くの注釈者の誰一人としてそれらが真なのか偽なのかを探求しようと骨折らなかった非常に多くのものもある。すべての注釈者が、ガレノスの手本に倣って、自ら自身の同じような観察ではなく、彼らが生きた時代の有力な哲学に由来する、仮説的推論によって、ヒポクラテスの観察の真であることを証明しようと試みてきたのである。こうしてヒポクラテスによって始められた観察の優れた基礎と、彼が信頼に足る正確な記述の模範として提示したものは、大部分無視されてきたのである。一方で、医師たちは、いかなる時代においても、彼らの相対立する理論を、彼の権威によって支持しようと好んで試みてきたのである。それらの理論は、ヒポクラテスの著作のいくつかの部分の曖昧性に助けられたのである。彼の観察だけでなく、彼の見解も（これについては、彼は確かに非常に控えめであったのだが）つい最近まで、それらが真であるかどうかを、誠実で良識あるすべての人々の経験に訴えた事実という権威と対立させられてきた。その結果、自ら自身の観察を書く際に医師は、それらの観察がヒポクラテスのそれと一致することを、少なくともそれと矛盾しないということを、示さねばならないというある種の強制下にあると感じた。このことの結果は、「自然」の真理は、それをヒポクラテスの所見に対応させるために、あるいはガレノスの権威にさえ合わせるために、しばしば歪められるということだった。これが、医学における確実な知識全体の源泉そのものに腐敗の元を導き入れると同時に、医学に関する主題について書く際に、学識を仰々しく誇示することをも奨励したのであるが、そのようなものは時間の無駄であり、医学にヒポクラテスやガレノスが何を考えていたかではなく、「自然」が何と知っているかを知りたいと思っている読者をうんざりさせるものだった。このような術学はヨーロッパではいまだに消滅していない。ヨーロッパのある地域で書かれた医学書で、古代の人々からの多数の引用で一杯にされていないものはほとんど存在しない。そしてまた、それらの引用は教養を誇示する以外の目的を果たさない陳腐な観察も含んでいるのである。

[その6：新しいものに対する愛好]

科学の進歩を妨げたもう一つのもは、今述べたのとは逆に、新しい物への強い愛着であった。こういったことが生じるのは、一部は、他の考慮すべき事柄に関係なく、何であれ新しいものを喜ぶという人間の精神におけるある種の原理からであるし、一部は、興味あるものについての真理を発見したいという切望からである。これが私たちにしばしば実体の影を把握させることになる。そしてまた、一部は、なんであれ私たちが真実であると強く願うものを信じるという傾向からである。多くの病気において治療方法の不確定性は、患者あるいはときに医師をして、より効果的で素早い救済を期待させるような新しい方法は何であれ熱心に採用させる。これが、秘薬や偽医薬品の法外な効能の説明を信じさせる普遍的な性向の源である。これらは患者に絶対確実との保証、賢明なもしくは誠実な医師ならいかなる病気の治療にも与えることのない保証をもって推奨される。おなじ理由によって私たちは私たち自身の時代に、ほとんどすべての不調において、多くの治療薬がそれらの効能によって高く称賛され、その後すぐに放置されるのを目にしてみた。例えば、冷たい水、未加工の水銀 (crude mercury)、石鹼、タール水溶液、石灰水、海水、ウォード医薬品、そしてさらにいくつかの毒まで。こういったものはすべて、それぞれ順番に絶対信頼できると思われ、そして時間がこういった期待のばかばかしさを発見してしまうと、これらはそれと同じ速さでほとんど完全に捨て去られてしまった。まるで薬というものは、それが必ずしもすべての点でうまくいかないから、いかなる病気の治療にも役立たないかのよう。しかしながら、このような新しいものに対する愛着は、古代文化に対する迷信的な崇敬ほど進歩を妨げるものではない。前者はときに知識の新しい追加をもたらす。後者は精神の活動的な力を、おそらくは科学の幼年期には幾分かの価値があったのだが、今では普遍的に知られることに対する無駄な称賛の中に宙ぶらりんの状態に留めるからである。冷静さと賢明さを持つ医師なら、次のような治療法に関して公衆のこういった一過性の興奮状態を利用するかもしれない。その治療法というのは、患者が、他の場合に彼らが服用するよう説得されるより以上の量やより長い時間処方されるのを目にすることで、ある薬の効能を確認する機会を彼らが彼に与えてくれるものである。新しいものに対する情熱は、実際は医学では特に大目に見ることのできるものである。というのも、知識を増やすだけでなく、有益な発見を伝達するように見えるものに対して私たちが喜

びを感じるのは当然のことだからである。

[その7：諸科学の体系への性急な還元]

いずれの科学であっても、そのすべての部分において一見まったく完全な状態だと見えるが、実際には欠点のある状態で満たされ、誤りのある体系への性急な科学の還元は、科学のさらなる進歩にとって障害となる。* [* Bacon を見よ。] 体系の意図は、科学をもっとも都合の良い光の中に置くことである。それ故、それは権威ある仕方で、そうして吟味もなく信頼性を手に入れるように、述べられる。ここに科学が、発明家や改善者ではなく、大家や学者といった人々に受け継がれる理由がある。一般に人々は体系に愛着を持つ。それは、体系が人々をして疑うことのじれったさから解放し、彼らの精神が確実に安らうことのできる確かな原理を彼らに約束するからである。そしてまた教師たちは、科学を一見完全に見える体系に還元することが彼らの利益や評判に貢献すると見なすからである。科学の諸原理に十分精通しているように見え、それらの基礎に疑いをはさまないように見える人は、疑いを持ち、また疑っていることをはっきりと認める人よりも良く見える。人類の大半は、科学にどっぷりと浸かった人々の価値の判定者ではなく、その振りをしている人々が身に付けている尊大さを、彼らが自分の役割をあまりに大げさに演じなければ、彼らに対して喜んで認めてやりさえするのである。すでに私は、「自然」の探究を一定の原則に沿った、順序だった計画に基づいて遂行することの正当性を示そうと試みた。科学を教える際には、計画的な割り振りにしたがって進めることが、同じように必要である。しかし、科学に含まれるあらゆる事実とあらゆる原理が完全に確立されるまで、それを一定の原則に基づく体系に還元することは不可能であるし、また、割り振りに関しては、しばらくは未決のままにせざるを得ない多くの条件も存在する。それ故、整然とした秩序立てを試みる、あるいは少なくとも、そのような秩序に導く確かな原理が存在しないところで、きわめて熱心にそのような秩序立てを求めることよりも、非連続的な格言様式 (aphoristical manner) を使用する方がときには良いこともある。

このような体系への熱情に特有の仕方で苦しむのが医学の運命だった。それはいろいろな時代に、ガレノス派、錬金術派、デカルト派、数学派、シュタール派、そしてまた、これらから合成

された他のセクトの手に落ちてきた。それらの各々がその科学全体を、一見すべての部分において完全と見える一つの形に鑄造した。それは、医師の、神秘的な神的能力や占星術や学校哲学の精妙さに対する種々様々な愛着に応じて、そういった色で染められた。しかし、こういった諸々の体系に伴う短所にもかかわらず、天賦の才ある医師ならそれらからある種の有益な情報を得ることができるであろう。

[その8:言葉の優美さに対するあまりにも大きな配慮、あるいは、表現法のわざとらしい曖昧さ]

科学一般の進歩に対して私が最後に言及する最後の障害は* [* Bacon を見よ。]、一つは、言語の純粹さと優美さに対するあまりにも大きな配慮である。今一つは、文体のわざとらしい韜晦と複雑さである。美的感覚に関わる作品や感情に訴える作品では、高度に修飾された言葉も非常に適切かもしれない。優美さや崇高さやパトスの適切な場所はそういうところにあるからである。しかし、科学が伝達されるべき言葉は、単純で、明快で、あらゆるわざとらしい飾りを取り除いたものであるべきだ。伝えるべき新しい観念を持つ独創的な著者たちは、彼らの意図をよりよく伝達するために、しばしば新しい言葉と新しい語句の使用を余儀なくされる。もしも彼らがそれらを明瞭に定義するのであれば、間違いなく彼らには、そして彼らにのみそうする権利はあるだろう。文体のわざとらしい複雑さは、現在大いに放棄されている。同じ程度に明晰で表現できる他の言葉が見出されうる場合に、専門用語を使うのは銜学的と、あるいは無知を隠すための偽装と見なされる。このような譴責は、時にあまりにやりすぎることもあるかもしれないが、一般に正当なものである。随分と長く哲学の名誉を汚してきた、あの学者間で用いられる特殊用語は、虚栄の原理から、あるいは、その職業に属さないすべての人々を科学から排除するという無価値な目的のために導入されたのである。しかし、それが学識のわざとらしい誇示であろうと、表現の純粹さもしくは作文の優美さへの慎重な配慮であろうと、人々が事柄ではなく言葉により多く注意するときには、それが科学の進歩を遅らせるのは明白である。

[ベーコン卿の著作の研究の推奨]

ここであなた方にベーコン卿の著作を熱心に研究するよう推薦する機会を私に与えてほしい。

彼は、あらゆる人々の中で、おそらくもっとも広大で洞察力ある天賦の才を所有していた。彼は知識を獲得する方法と科学を推進する方法を、比類のない判断力と明快さで説明した。同じように彼は、本当の哲学的帰納法のすばらしい見本を、とりわけ『風の自然誌 (History of the Winds)』において、私たちに残している。これや彼の自然誌のいくつかの論考は、自然への探究を行う彼の方法の見本という光でしか考えられえない。それらが含む事実は、当にすべきではない。というのは、当時一般的に受け入れられていて、真であれ偽であれ、彼の目的に同じように役立つものを採用するよう余儀なくされていたからである。彼は彼に特有の言葉を使用する。それはあまりに比喩的で、ある場合にはその言葉を曖昧にしていると非難されてきたが、たぶんそれは正当だろう。しかし、一般的に見れば、それは、科学を伝え、明晰で、高貴で、印象的であることにはよく合っているのである。⁵

-
- 1 底本は、*The Works of the late John Gregory*, M. D. 4 Volumes (Edinburgh: printed for A. Strahan, and T. Cabell, London; and W. Creech, Edinburgh, 1788年) 中のVolume 3: *Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician* (1770年, pp.117-172.)である。本文確認のために、次の文献も参照した。Laurence B. McCullough (ed.), *John Gregory's Writings on Medical Ethics and Philosophy of Medicine*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1998. 本文中のイタリックの箇所は、「」でくくった。ただし、大文字で始まる言葉も「」でくくった。底本とMcCulloughの本文との相違については、重大だと思えるもの以外はいちいち指摘しない。短い補足は[]に入れて補った。また、講義の最初に置かれている目次の見出しは、本文の該当箇所と思われる箇所の冒頭にゴシック体で組み込んだ。
 - 2 *の付いた原注は、*を付けた上で、[]に入れて文中に組み込んだ。
 - 3 原著では、この段落の初めに3. という数字が置かれているが、この段落以下は、この講義の最初に置かれている目次の見出しでは、2. の項目の下に置かれ、特別に数字を立てられていない。内容から考えて別段改めて数字を立てて区別する必要もないと判断されるので、目次の見出しに従って、3. という数字は省くことにした。本講義では目次の見出しと本文内の区切りにいくつか齟齬が見られるが、以下では両方を併記している。注1. に挙げたMcCulloughのテキストでは、齟齬はそのままにされている。
 - 4 William Cullen (1710-1790) のこと。エディンバラ大学におけるグレゴリーの同僚で、自らのノートに基づく臨床講義を行ったことで著名。
 - 5 *History of the Winds* [ラテン語の原題は、*Historia Ventorum*である] は、1622年に*Historia Naturalis et Experimentalis ad condendam Philosophiam; sive Phaenomena Universi* [哲学を打ち立てるための自然誌と実験誌、あるいは宇宙の諸現象] という表題をもつ著作において発表されたもの。この著作はベーコンが目論んでいた壮大な著作群（この全体がいわゆる『大革新 (*Instauratio Magna*)』と呼ばれるものである) の第3部をなすものである。*History*を自然誌と訳したのは、その論考が含まれる著作の表題 [上記のタイトルの訳者による下線部] を考慮した結果である。ちなみにその第2部が『新機関 (*Novum Organum*)』として有名なもので、長短様々なアフォリズムで叙述されている。